

琉球大学学術リポジトリ

和歌集

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2021-09-08 キーワード (Ja): 所収コレクション : 琉球大学附属図書館宮良殿内文庫, 宮良殿内 (みやらどうんち) キーワード (En): In Collection: The Miyara-Douchi Collection (University of the Ryukyus Library) 作成者: -, 2021/9/8 16:08 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/49004

和歌集

宮内省

天智天皇

秋乃田あきのた此こゝりり不ふの庵いほのとほびやあゝそ
まろまろ衣え子こハ露つゆしぬしぬし

持統天皇

春はるささとく夏なつささふふくく白妙しろたへの

衣え不ふしてふあまれかぐ山やま

柿本人麿

あーいふの山やまどり乃のおれままどりり松まつの
なぐなぐくくふふ衣えははとりりゆゆき

山名之寺人

田子に浦りいろういあひ白まはらぬの
婦ののきく糸よ言はかりは
様丸たま

奥山母りみちりあみとけなく糸の
ちきまきくとたぐ秋はねり

中細家持

彩のよせはけりりそく彩乃
ころき成れしむ松り玉あふ

安陪仲慶

あひのいりやりさげみまかまのふれ

らういれいよいあひ一月うま

花撰法師

わうに唐はらやこのいりそしるうまじ
ち成こうち山と人あひなり

小野小町

花の色はらりりはなられいぶく
我身よふふらたがめせりまふ

蟬丸

ちきやこのはらりりはなられいぶく
ちきやこのはらりりはなられいぶく

泰識

和国のこと十島をきてて記出ぬと

いふはつぎよあま乃初年

僧正遍昭

と神風雲のかまいぢり吹とがよ

乙女ははぐくまげりそごめを

陽成院

けくむねのまゝよりおつる見るは

恋とはよりて別れりりぬる

河原たまた

みち乃く此志のふらぢり誰か

見んはらめり 教あるおくに

光孝天皇

君うたぬまの胆よりいぞもうつむ

我衣子又雪はありけり

中納言新平

立りて決いなむのふのみぢりあつ

まゝとくきくハ今うけり

立原業平相持

子子振沖代をきりてをるた川

かろくれるカ下り 冬之節とは

藤原敏行朝臣

任乃元此きこし小よるるをん家さる

人愛のかさひち人あまぐれを

休勢

難波さくみしう記あしのみたまひ

あつぐこのさ成りてくしをすま

元良親王

まじぬまバ今もあおれト示はなる

身せほくしてをあま愛とぞあ

素性法師

今あむしといひしきり小長月乃

ありぬの月とまらおげうる

文屋康秀

吹うに秋のくさきさる玉はあれハ

ひさしを成あるしやうらん

大江千景

月見後ちち母物そやれしき

いの身しあらの梅はあしぬ

菅家

六のそとびかぬこきとりあへんて手向山
りみぢれゆき神乃まふく
三條右大臣

あつりおらあふさう山のけ孫かつく
人又あふれでくねすもくね

眞信公

少長山ま子のりみぢ紫公あはは
今てびれ神幸まこなん

中納言兼輔

見う乃原ま記てなぐねいけみ川

おとまことしてる恋かろん

源宗平朝長

こことば各ぞらびーさ返こりあひ
人かたもあまぬとおひ

九河内新恒

おのく小あふまおたらんお若の
を記すぞりせり志くまぐら花

壬生忠岑

者のほきさるくんえーまこれ
あつさこぶらやらまこあひなし

坂上是則

約不^りく^る一^つ年^{とし}を^あり^ます^の月^{つき}を^みた^ます^をよ^し
よ^しに^あら^はす^をよ^しに^あら^はす^をよ^し

春道列樹

心^{こころ}の^けを^たげ^て志^{こころざし}を^たげ^ては
ま^まに^あら^はす^をよ^しに^あら^はす^をよ^し

紀友則

久^{ひさ}し^くの^やり^のど^をき^こま^すは^らい^ふ
志^{こころざし}を^たげ^ての^ちを^たげ^て

藤原興風

誰^{たれ}か^もし^て私^{わが}人^{ひと}を^しむ^す高^{たか}砂^{すな}の

松^{まつ}も^むし^りに^あら^はす^をよ^しに^あら^はす^をよ^し

紀貫之

人^{ひと}を^しむ^すは^らい^ふも^あら^はす^をよ^しに^あら^はす^をよ^し

記^きを^たげ^て志^{こころざし}を^たげ^て

流忍浄巻

夏^{なつ}の^つき^をま^まに^あら^はす^をよ^しに^あら^はす^をよ^し

心^{こころ}の^けを^たげ^て志^{こころざし}を^たげ^て

文屋胡康

志^{こころざし}を^たげ^ての^ちを^たげ^ては^らい^ふ

つゝぬきとめぬ玉ど敷るる

者近

志く終り牙とバををばちうひて

人の舞はれおけも玉うら

参議等

あさちぬのをはれ、一のいふあのだれと

向まりてゐるど、人乃あひいそ

平兼盛

思ふれささきよ出たりまがまひい

地やみふと人のそあまこ

壬生忠見

志とてまらりあいまぶきこまなり

へまじだのくしうおりのいふめー

清原元輔

契されしのみ又袖でまかりほ

己来のまの山た見こはれど

中細玄毅忠

あひ見ての後れんよくおまバ

むく、まきの紙あははるまかり

中納言朝忠

あふ事乃きそしうきを中ぐよ
人をもみ成もろしけうま

謙徳公

義ともしくばり人をみものして

采のころくになりぬ徳をいふ

曾孫好忠

ゆゑ乃と成りたるあな人がぞとま

やふ事もしぬ徳のまらうれ

惠慶法師

いふ事清きけまるあやのまじりきふ

人よそ見くぬ秋ハ事ふたり

源重定

風成いふみ岩うはまのをけまの

くさけそまのあやふら

大伴長能宣祖

御垣も清士のましく火れねえ

ひらけまらつ物をまもり

敬原義孝

君のまめれうらざりー命ま

なごくもがねとあひいなるれ

藤原実方頼長

かきしとふ元やうがきのこころもく
こころを志すところありあひと

敬忠道信物持

ゆめをばくく物と志りたぐ
る成る程めしき物なくあうか

右大納道徳母

秋きほくひよりぬれよのあくるまは
いふことしき物とくがしる

儀同二司母

日手終一の地末まががさるを

ちふ成るがりの命もうる

大納言公恒

流乃るはきくく久しとまりぬれと

かきしとふ終て物とくがしる

和泉武部

あきとふまこの世乃外志おのいあ

今つさいのりあもるる

崇武部

めぐりあいでみりやうまも日うぬまふ

そりぐきまよし ねまは月うら

大氣之位

有るの心家のこころの月あは

いそろよみくまはまはる

赤深清

あまのりごほます 一まのさほし

かこくくまの月と

木印 小式部内侍

たのしくのこころのさかぬき

まじこみもさるあまきす

伴持の大輔

あし 一はるのこころのいそ

あし九系ふ白いありうら

清少納言

あをそめてまのそくまはるうら

ふふあふのうら

たふま道雅

今ふまのうらんとがうら

人けとるうらていふうら

権中納言定頼

朝あさのくさくさうがれあざのりきあざしぐは

あしあしのつれまあしのつれまあしのつれまあし

相換

娘むすめもままひひふふととぬぬ神かみささ前まへあるあるるをを

ああくくちちるるんんととままととままととままととまま

若大僧正わかしゅじょうのつれまつれま

ああくくちちるるんんととままととままととままととまま

ああくくちちるるんんととままととままととままととまま

園内うゑんのつれまつれま

春はるのああれれああつつりりるるああつつれれよよ

ああいいななくくききんんああままととおおいいれれ

三條院さんじょういん

ああくくちちるるんんととままととままととままととまま

ああくくちちるるんんととままととままととままととまま

能因法師ねいんぼうし

ああくくちちるるんんととままととままととままととまま

ああくくちちるるんんととままととままととままととまま

西遊法師さいゆうぼうし

ああくくちちるるんんととままととままととままととまま

ああくくちちるるんんととままととままととままととまま

大納言経信

ゆふぎ終八門田のいるををとげまて
河のまのやり秋を病がうく

祐子日記王家記序

書にましくきり一のまのあがるま

かきやゆきぬめりまうすま

高砂志おの乃はくく候まなり

高砂志おの乃はくく候まなり

とまのうとみきもあゝるん

源後頼朝伝

ろありあり人成るるをのこ母ろ

まげしりしりいのぬまのせ

藤原基俊

契を記し一をりて病を命を

あまれあし一の秋をいぬあり

法性寺入道前関吳政大臣

まののしりまにあそりれバ久しる

今あまのまのまのまの

崇徳院

洲をまやま岩ませりし河川の

よれても可なり
源兼昌
あはれとぞ子

淡路島よりちどりのなく
くねねとめぬはるは冥守

た京なま頼猫

秋風よほそるじく
待賢門院堀河

るくうそとるびねも
みざれてけさは相張

後徳大寺たは
不とそ哉と啼はり
只玉の舟がのそねか
道因法師
おのいそ花こそも命
るそりーごのねるみ
皇太后さま後徳
世乃中
山のおくも無
藤原清輔朝臣

るがうへちましく世たりや忠をまきん
うしやうし世がう今あのみき
後惠法師

頼みすげ物おしうらふゆいで
園のいままはまきうらまたり
為行法師

るぞくとそ月やあまのせおのほゆる
かうらうがやわのうらまうら
二床蓮法師

むくさめ此語もすはね枝の葉り

要うらうのぢり秋の知ん言

皇系門院利高

新波江のあそむかり海の一葉か

身をそくしてや意こころい

式子内親王

玉の志よきくまばうらわあが

忠ぶりのあふらうらまぞとふ

殿富門院左様

んせだやまうまの雲の神いそ
清もぞぬまう色はかりと

後京極権政前太政大臣

きりくはくもわがわがのこむらに

夜めくまじいとりかも海ん

二條院源氏

我神志をひぬ見ぬ沖の石は

人そしめかひりくまらし

強合者大僧

世中、はねるもかえら法く

あまのこむらの子のはなでうか

新海雅彦

みよれ山の秋をせはるま

うらまをさむく夜らるり

前大僧正益園

おふあわくうき世の民り

歌よみれとみるめら神

入道前大僧正

花さうぬありのを乃吾あして

かりゆくまのいつがなをけ李

権中納言定家

あぬ人成まの不忠うしの文を記り

なすやりか乃所もそりく

正三位藤原

同致ぐるのの川のゆらぐ様ハ

みそはらう夏れろく一なりをる

後鳥羽院

人毛ねーいそ氣ろくめーあぢきまく

世をわりのゆは物そふ似ハ

順徳院

百敷やあら貴新瑞の志れぶまも

る成あまよりあるむりーるのりる

後鳥羽院

物もまじきそあやら見さうこうきの

あそいあいのまより雲やせくらん

玉津宮大御神

名もありのろそいさうのこころを

まうにまきしものまははれあん

人丸大御神

不のくとあーのうのあそいそりに

ーあかきまゆくあねーそそふ

後成

きとてもいさんしゝるは山さく

かきみののころころのあひら

河法師

ころまきし尾ぶれはうさゝるまふ

こまやけぬり沖く舟の

定家

かひの芳も花のうらりふるりこそぬ

小まのせいのころのあひら

津亦法師

たるとるく家らわねりしうせへ

はらぬ心れむむくらん

兼好法師

おきいさ本首のりさぬのあきくも

うめややしあひらのあひら

兼運法師

とくまわすた述へとまのうらふ

花となくけりやあまぶらん

僧正通昭

蓬萊此ふらにしぬぬをらるるを

なりし久あせむとありしむく

小野小町

色見へどころろ泣ふよの世の中一乃

人はさくら老こそ長けりあをむけり

直忍業平朝臣

月やあめぬきやむしものころろぬ

家月三つのもとのさうりて

文屋康秀

明くふ秋の葉木のさねるれり

むしふくせせりしとみん

大伴正主

かゝん心ささまよりて見ておらん

うしほめる牙も老や一思ふむ

花撰法師

我唐き都のきつとととととと

よ成る心と人いりよる

後京極坊政た政たは

あそよりい志が笑の花よあま

是の如くはとらん喜地山と

道鏡

こゝのむ七世をーろのゆゑを
と筆をもひつのみちよくする

正二位家隆

あけはすいそへんふのこゝろ

そゆぐ月のす人のーろ

西行法師

表いふ者家のけむのこゝろ

あそいせさうぬまぶこのく

後た后皇文天皇後成

吾事ゆきこゝのまきい

月ふそけけるありのやぐ

權中納言定家

ての川さハかろりる

あそいそ月のいりる

天智天皇

秋の田此かり不乃唐の臣成ありこ

わう天子ハ露下一ぬまは

は清和の公ハ秋乃未田成也臣氏乃唐乃臣なりと云むと云む
露下をく申使く申ぶくを記ありと云むと云むに
は只ぬまはくして後をわ一也平亮利世安氏乃弟に性富也
海を有くせし天子乃御身にてて臣の平若乃介所也清康
あり一殿と云ふと有れと也

持統天皇

春色て夏ま小々々々白妙の

さくらまをりてふあま乃かり山

は清和の公ハ春此間ハ天の香久山かまきと云くまをりてて待も
見さりに母去るぬれハ夏の来り雲の衣をぬまはては
のぬら小ありせ白妙の衣ありと云は後記也

小野小町

まじぬまば身ををるにくこの根せきして

はくまあわくばいさんとやあひの婦

身のまをりてしるまはぬまば身ををるに草の根せきと云む
おとくまをりてはゆいむと云ふと云ふ

橘の白妙

漢人

邦とあはば孰とたれてと引はるん

かりまたたわハ君をて引はるん

予のころハ何れハ君を飽すま出ろを恨ふは
甚だなくて邦とあはば我らとよめて年を経バ
かりとあはれども君の来ぬとのあるさとやうとあ
を扱ふはとてよめり奇也

後人

山里ハお乃さといーき事こそあま

世のころはすりハすみよりをとり

予のころあささくちなり

古邦今道

予りよあはれしつてはいとく世の中ハ

流乃さつ流り一風そーきめ流

予のころは知ろてハ世の事やつてはいとく世の中ハ
つとよとハ流のさつ流り風のふくそく飽ろをどと

よめり奇也

後人

いふあはれんつとよの中ハ母候よりハ

世はつとよとのゆりえこそつとよ

奇のころはらうを成いする和の中に泡とく世のころ
事ハきめりやいふも成りあり奇也

菫原清輔朝臣

たぐくも又このはや玉のそはれを

ろしやとみしよそ今ハ云へり一様

奇のわにさきりしそはれ事と今ハ云へり一様

りりろはれまのそくふきとむりしそをいよめり奇也

後人

あはれまきりしはれいそ世の花うれ也

後せん人のおとづきとせぬ

奇のころはらうを成いする和の中に泡とく世のころ

あはれまきりしはれいそ世の花うれ也

菫原清輔朝臣

人あれまきりしはれいそ世の花うれ也

まらういて君があはれいそ世の花うれ也

奇のころはらうを成いする和の中に泡とく世のころ

あはれまきりしはれいそ世の花うれ也

和泉式部

あはれまきりしはれいそ世の花うれ也

あはれまきりしはれいそ世の花うれ也

舟のちんばらにさう子の小式於舟ゆりせりし時
上東門院より小式於の邊より衣下を乃出さる
下したまひををせえんげとてくらる舟なり

浪人不知

あふ坂乃花のうせはこゝにせられ

ゆく東より花は流れてぞめ

舟のちんばらあり夜のあしし此風はさむされど
ゆく東より花は流れてぞめとてなり

浮世

花を川よりふれあはぬわが花乃

流るるりゆく物よせりりあは

舟のちんばら花を川の淵よりあはぬとわが花は流る
かたりゆく定ある世のさしなれ人よ恨むは物よ
枕をけるれとたり

二首内

見よとせは禁むりりり笑うめく

花も奥あふりし心

舟のちんばら花を川の淵よりあはぬとわが花は流る
かたりゆく定ある世のさしなれ人よ恨むは物よ
枕をけるれとたり

舟と舟あり舟也

湯殿院

ほくを縁のまのよりあつるみるは川

あぞつさりさみ淵となをぬね

あのをらばそのまおひそめしうらねおひいと

たらしめ水のぬたさるぼりりて淵となふり

あへく疎くまふや也

紀貫之

志くを海と川ぬ長いしくむらひ

下京のうらむに多はそりあり

舟の如ハ船は川ぬはけりくむらひハ幸たかたむら

のこしに多はまゝらとあそらぞりあふやたり

淡人

林風りあ人見たりぬるみぢ紫比

ゆきささぬふぞりけり

舟のそらハ林風よりぞらふみぢのゆくも急

けさぬがきしく我が舟のそりさふぞりけり也

紀貫之

見舟人もくみ教ぬる奥山乃

あみぢハ板志舟きむりり

舟のそらハ舟きむらひのたてぬ物なれと板橋

り 是より其の流命と云ふ事後り事也

漢人不知

ちりりりりりのくれぬわのけりや

民のよみみぢぬ松もんくえれ

事此より女より身ハ兼たり真心をかくせらば

つ日事あり乃打ハえくくくくくのゆり也

やこり此れ大やうおれやうにさむるといふ

あるい身よりくたり又さむぐのゆり也

あそりあそりやうはくも身をかくる事也

あるは流事ありけりらととらけりらととら

くこのうまい出くはういれもそのうらう

うこりりり成貞女乃烈女也

去夏よりくくく

足どりりたりもた松のあり

いこり一葉も此の折松の

糸よりりりりりりりりりりりり

しりりりりりりりりりりりり

糸本らりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりり

和らりりりりりりりりり

春日列樹

花のやうにいちあふやくくくくくくくく
るくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
月日乃くくくくくくくくくくくくくくくく

淡人志

世ようれであのほくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
竹くくくくくくくくくくくくくくくくく

よみ人志

風あふあふあふくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
君ごいごいごいごいごいごいごいごい

閑院

くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく

く終るにせしむるに人として終るに足る事
れまこと歎てしむる事也

源人不知

茶の一本ゆかりしむるに

茶ハんれごとくあり終るに足る事

茶のあらはしむるに一本ゆかりの
草いれも終る事ありあまればなり也

賢者法師

かゝること深山の茶の本
あつるに終るに足るなり也

茶のあらはしむるに一本ゆかり
あつるに終るに足るなり也

旅人不知

かゝりあつるに足るに
あまればなり也

茶のあらはしむるに一本ゆかり
あつるに足るに足る事

茶のあらはしむるに一本ゆかり
あつるに足るに足る事

紀友則

茶の羽乃に足るに足る事

びつと香あくるもやむいぬうれ
弁此うらぐ探のぬ乃どくねの衣はうもくあきど
うら香きく匂いぬりころとやあくる奇なり

業平のたぬ

をぬまらにけぬも終の有くこそ

いふくんましく引本をうらぬ

弁のうらに牙のをぬれがのれぬわれのありといは
そににらみはえましく奇きまいふくあいにき
君とあともをわらうやとあつ奇也

業平のたぬ

世の中ははらぬれ乃あくるぬ

ふせもやいのう人け子のこめ

弁のうら世の中にあきまねのあれうーい
まぐし親をよせもといのう人け子のきあて我
乃とあていし人乃とあてけくよあり

源宗平のたぬ

常盤なる松のみどりも長くれ

今いしーのなまきりなり

弁のうらに是のやいみどりあれば長のみま
松乃うらにーなるまきりのすはとよをを流ら奇なり

紫性法師

みくのきや人しりくくむくむく

おしとふ折ておほくよと兼

すのうらら人おらうはわらとふあふけさげ

花をゆきふ折をおほくよと兼

りしと兼たり

淨智

まきすもそんをみとてゆく所

記すまにまよとてやるしんふ

すのうららかきみのたむじくをふの兼

あたらしく見ゆそしゆく所は記をまにす

あたらしく見ゆそしゆく所は記をまにす

凡に心祈

我やあまれをそらにまらん

教るんのもぢあいにしんふ

すのうららハ記をそらにまらんハ記乃ちを

うせぬと記ししんふかちりそのうちあいに

うらんとししんふをまらんすなり

魚の西廻船

おのまはしししんふや世の中

とくれされさるきあふらるん
奇のうらみおのまげく末のたつとすのわを記
うまきあれといつれはゆりうとと人れいのを
乃ちらそに海へどまり

漢人正氣

おくまばおちぞーぬべ貴秋疾乃
枝もたりよおけらるる
奇のうらみおのまげく末のたつとすのわを記
うまきあれといつれはゆりうとと人れいのを
乃ちらそに海へどまり

やぐらみ

人乃ららるるやぐらみ
秋香りののまげらるる
奇のうらみおのまげく末のたつとすのわを記
うまきあれといつれはゆりうとと人れいのを
乃ちらそに海へどまり

分出川入右大臣

君がしあひこ
花もかきぞ百代や
奇のうらみおのまげらるる
うまきあれといつれはゆりうとと人れいのを
乃ちらそに海へどまり

射類和歌集

高

後柏原院

高とみまは月りまは光り

秋せたる日の夏去るは

低

道と院

高や志のぐんやこもり

高や此素根にこもり

高

お春海流

高やまは江乃波う海あり

山もくくるる高は

山

横六河を改め

此の所の平は山乃ありて

深れぬる池もつらかりしん
お寧相基池

山陰の岩がづのひのここれあり

おれそのおくもおれりれり

後柏系院

お百を流すおひとりのこりしん

海士ハ公のこりやハあり

横六河を改め

よりいと流らんわうこりしん

そのありき此月のゆくをせ

道をと流

おれどおの月ハおれ川乃

ありしにこりてせくこりしん

海 継

おれりるれたのこせありてに

いとりにるれありあふ

道をと流

おれりけき首の月ハこりしん

さうりさうりのつらよ涙をい

親

后柏系尾

あせの秋を身にしむるあびの

まのこむむをいふすしめて

階

為 廣

うーあせ身をーやときいそ此遊

竹のよかまはしりあはるま

視

深 継

あせわれぬ人けあふい川への

あせをいふはしりあはるま

穂

后柏系尾

あせしけをるるくられぬと

入秋のあせをふくならを

あ

日

秋にこれあはるるあはるるあ

あせのあせをいふあはるるあ

あ

海海道を

あせをいふあはるるあはるるあ

あせをいふあはるるあはるるあ

た

右中ぬ道流

浮世の白らりたるを興はゆふ
舞臺の人もこそあれ

右

沙汰宗世

笑げくゝ急まふ御も
あはれあともゆる雪の白濱

勝仁親王

谷の水子の松を歌しても

そらさぶぬいのうち哉

忙

一位

世中よ明ぬれぬやぬを

身につとむべき一りばり

清

後柏系院

かそいしよ屋のやりをどあづ

のらる細かまがれてうゆく

滑

雅 親

今も毎世流らん百もをせ

かたしいんしを死川

新

内を院

手んちりぬるものを流せ

まろくの雪北けこせ

舊

政

為

貴

貴とハミヨクニシテ古キ世乃
長クシヨクハミヨクニシテ



